

グローバル化を考える

「年齢・性別・運動神経・障害の有無にかかわらず、誰もが笑いながら楽しめる」ゆるスポーツ（老若男女健障スポーツ）。企業や自治体とも連携した取り組みが広がっており、メディアにも多く取り上げられるようになりました。

今回は、ゆるスポーツの成り立ちや世界への展開、活動を通じて得た想いを、世界ゆるスポーツ協会代表理事の澤田智洋氏にご寄稿いただきました。

スポーツ弱者を、世界からなくす。 ——ゆるスポーツの挑戦——



世界ゆるスポーツ協会 代表理事
澤田 智洋

はじめ

昔からスポーツが苦手だった。否、嫌いと言っても過言ではない。体育の時間が本当にしんどくて、「次生まれ変わったらスポーツがない星に生まれたい」なんて思っていた。そんな私には、9歳の息子がいる。彼は、先天的に視覚障害を持って生まれたため、目が見えない。するとどうなるか。親子で公園に行っても、できるスポーツがないのだ。他の親子がサッカー、バドミントン、縄跳びに野球と楽しむ中、我々親子はただただレジャーシートに座っているだけ。はたと思った。我々がスポーツから疎外されているのは、我々のせいではなく、社会の方に問題があるのではないか。ならばと逆転の発想で、私や息子が活躍できるスポーツをゼロからつくればいいのか。そう思い立ち、2015年4月10日に「世界ゆるスポーツ協会」なる団体を仲間たちと立ち上げた。



「ゆるスポーツ」

「ゆるスポーツ」とは「年齢・性別・運動神経・障害の有無にかかわらず、誰もが笑いながら楽しめるスポーツ」のことだ。「老若男女健障スポーツ」と呼ぶこともある。件の「世

界ゆるスポーツ協会」とは、ゆるスポーツをつくるクリエイター集団である。設立から7年経ったが、開発したスポーツは100競技以上、参加者数も20万人を超えた。今では多くのメディアに取り上げられ、数々の企業とも連携しながら、動きを加速させている。では、どんなゆるスポーツがあるのか。一番初めに開発したのが「ハンドソープボール」である。



これは、ハンドボールが元になっている競技だ。違いは、専用のスポーツ用ハンドソープ（ツルツル）を使用すること。試合前にプレイヤーは「スターティング・ソープ」を手につける。試合中もボールを落としたり反則を犯すと「アディショナル・ソープ」をつけなければいけない。すると、みんなボールを丁寧に扱うようになる。ボールスピードが落ちる。能力がフラット化される。体験会を開くと子供からお年寄りまで幅広い年齢の方々が集まる。

「イモムシラグビー」は、専用のイモムシウェアを着用してプレイする「足を使ってはいけないラグビー」。這ったり転がったり、イモムシ気分を楽しみながらまったりと動く。

タッチラグビーの要素を盛り込んでおり、ボールを持っているプレイヤーが相手プレイ



ヤーに触れられると3秒以内にパスしなければいけない。加えて、3タッチされると相手ボールとなる。これなら従来のラグビーのような「激しい接触」がないので、誰もが楽しくプレイできる。もう一つこの競技の特徴は、足に障害がある方でも楽しめること。実は開発の起点になったのは、二分脊椎で車いすに乗って生活する友人である。彼の家に遊びに行ったところ、車いすは玄関に置いて、這って生活していた。「ちょっとお茶とってくるね」なんて言ってスイスイと猛スピードでフローリングを進む彼を見て、「この動作が生きるスポーツがあれば、彼らが健常者と言われている人に勝てるのでは」と閃いた。仮説的中。開発直後のトライアルで、車いすの友人は他の参加者を圧倒し、大活躍した。

「ゆるスポーツ」×自治体

最近では自治体から、「新しいスポーツをつくってほしい」と依頼されることも増えている。食、自然、人。地方には、まだPRしきれない魅力がたくさんある。しかし、例えば外部団体に委託してPR動画を制作しても、一過性のバズに終わったり、地域に住んでいる市民の意見がそこには反映されていないため、せっかくお金と時間と手間をかけて制作したものがレガシーとして定着しないことが多い。では何故私たち世界ゆるスポーツ協会に、スポーツ開発のお願いがくるのか？富山県氷見市と開発した「ハンギョボール」を例に見てみよう。この競技は1年ほどの開発期間を経て、2018年に誕生したスポーツだ。プレイヤーは脇にブリ（のぬいぐるみ）を抱えてプレイする。パスやシュートは、ブリを挟んでいる方の手で行わなければならない。不自由である。なおかつ、シュートを決めるごとに脇のブリをひと回り大きいものへと変えなくてはならない。益々不自由だ。ブリは出

世魚なので、その特性をスポーツのルールに盛り込んでいる。



では何故氷見市とこのようなスポーツを開発したか？理由は大きく三つある。一つ目は、スポーツというある種のメディアを活用して、地域の魅力をPRすることだ。そもそも「ブリ」も「ハンドボール」も氷見市の魅力である。この2点をスポーツ化することで、かつてない角度から情報発信をすることが狙いだ。事実、ハンギョボールはこれまで多くのメディアで取り上げられ、Twitterでも60万回近く動画が再生された。二つ目の理由は、地域住民が自発性を持って開発に参加することができるからだ。実は「スポーツの発明」とは誰でもできる。子どもの頃を思い出すと、誰もが公園で、学校で、今あるルールをちょっと変えながら遊んだ経験があるのではないだろうか。だからこそゆるスポーツ開発の現場では、地域の方々を主役にする。有識者やクリエイターだけではない。学生や主婦の方、ご高齢の方も含め、多様な方に集まっていただき、「新たなチーム」となり、地域の魅力がぎゅっと詰まったスポーツを対話しながら開発していく。そして三つ目の理由は、開発されたスポーツが、一過性ではなく運営次第では地域に長く根づくものになりえるからだ。ハンギョボールの場合は、定期的に氷見市で大会が開催されたり、学校の授業に盛り込まれたり、グッズが売られたりしている。新しいスポーツが、新しい文化になっていく。つくって終わりではなく、つくってから始まるのがスポーツ開発なのである。

この他、神奈川県では「横浜ゆるスポーツ協会」を設立し、継続的に「横浜らしい」スポーツを生み出したり、石川県の「小松ゆるスポーツ協議会」も福祉領域を中心に独自のスポーツを開発し続けている。その他熊本、鳥取、徳島など、数えきれないほど多くの地

スポーツ弱者を、世界からなくす。
ゆるスポーツの挑戦

グローバル化を考える

域と一緒に活動をしてきた。2019年からは「ご当地ゆるスポーツアワード」を開催し、「みなさまが考える、地域/地元の魅力が詰まったスポーツアイデアを募集しています」と呼びかけたところ全国から素晴らしいアイデアが集まった。初回大会で優勝したスポーツは「アブウド採らず」。限界集落の壁に直面する富山県南砺市利賀村を盛り上げようと開発された。ご当地ゆるスポーツの活動はこれからも益々発展していくと予想をしている。

「ゆるスポーツ」×世界

ところでお気づきでしょうか。私たちの団体名に「世界」という言葉がついていることを。そう、ゆるスポーツは発足当初から「日本から世界へ」新しいスポーツ文化を発信・定着させることを目的として設立された。何故なら、近代スポーツとは、イギリスを中心としたヨーロッパ諸国、あるいは野球やバスケットボールを生み出したアメリカを中心に発展してきたからだ。柔道をはじめ、日本から始まった個別のスポーツももちろんあるが、スポーツの大きな潮流自体は海外で生み出された。私たちには、この流れに一石を投じ、日本ならではのスポーツ文化を生み出したいという野望がある。勝算は二つ。

一つ目は、加速する超高齢社会という社会背景。この状況を憂うだけではなく、歳を重ねても生き生きと暮らすことができる社会を世界に先がけてつくってしまえばいい。そのためにスポーツという要素は、健康面でも孤独対策という意味においても必須だ。高齢になっても楽しめるスポーツを日本でたくさんつくっておく。そして、他国が高齢化していったタイミングで輸出をする。例えば「トントンボイス相撲」というゆるスポーツがある。お馴染みのトントン相撲を、指ではなく声を使って行う競技だ。ルールは簡単。大きな声で「トン！トン！」と叫ぶだけ。あとは、その声の大きさに応じてデジタル土俵が揺れて、その上にいる紙力士たちが取り組みを始める。身体がうまく動かなくても、多少なりとも声が出せれば立派な力士として参加できる。なおかつ、声を出すことで嚙下能力を鍛える効果もある。楽しくスポーツをしていたら、結

果的にリハビリになっていた。という体験を提供できるのだ。



二つ目は、日本にはスポーツにも役立てることができる技術が多くあるということ。「経済複雑性指標」において、実は日本は長年世界1位を獲得し続けている。これは、その国が輸出する品目の多様性と複雑性に基づいて国をランキングしたものだ。GDPや一人当たりの生産性といった指標では年々ランキングを落としている日本だが、実は「ものづくりの底力」はまだまだあるという解釈ができる。私たちがどんな突飛なスポーツアイデアを思いついても、形にして、実装できなければ絵にかいた餅でしかない。しかし、どんなアイデアであろうと、「それ、うちで形にできます」という人や会社がいるのが日本の強みなのだ。

「緩急走」という、座ったまま楽しめるゆるスポーツがある。専用のイス、あるいはクッションの上に座り、座ったまま走ったり、止まったり、左右に傾いたり、指示に従って動くことで、画面の中のバーチャルランナーが動き出す仕組みだ。この競技では参加者がアスリートならぬ「イスリート」と呼ばれる。



このスポーツを実現しているのは、テイ・エス テックという企業の独自の技術だ。車用のシートを60年も開発してきた、「座る」のプロとも言える企業だ。緩急走は、テイ・エス テックが培ってきた知見や技術をフルに生かし、最適なセンサーを取りつけ、果てや最高の座り心地も実現している。日本だから

こそ生まれたゆるスポーツ、と言っても大袈裟ではない。

超高齢社会という社会背景と、技術の超多様性。この2点において、ゆるスポーツは世界に対しても勝負できる。そんな思いをもとに、少しずつ世界展開を始めている。2019年9月にはヨーロッパの支部として「エストニアゆるスポーツ協会」を立ち上げた。エストニアは人口が130万人強という比較的小さな国でありながらも、世界有数のデジタル国家として注目を集めている。あらゆるシステムが電子化・簡易化されていて、日本人が悩まされている役所での手続きなどもスムーズに行うことができる。また、「e-residency制度」が導入されており、外国人でもエストニアの電子国民として電子登録できて、例えばエストニアでの起業が容易になったりする。かくいう私もエストニアの電子国民である。そんな「国まるごとベンチャー」のようなエストニアこそが、ゆるスポーツの世界拠点としてふさわしいのではという判断をし、支部立ち上げに至った。まずは定期的に地域住民を中心としたゆるスポーツの体験会を行いながら、ゆくゆくはエストニアオリジナルのゆるスポーツも開発する予定だ。エストニアはサウナで有名なので、サウナスーツなんていいかもしれない。



その他タイやシンガポールで体験会も開催し、どの場所でも大盛り上がりであった。今は現在進行形で香港や韓国からも導入したいという依頼がきている。スポーツが不得意なスポーツ・マイノリティは世界中にいる。世界ゆるスポーツ協会だからこそできるスポーツアクションをこれからも興していきたい。

ゆるスポーツクリエイターからのメッセージ

私たちが伝えたいメッセージは幾つもあるが、一つあげるならば「ルールは変えられる」ということ。目の前にあるスポーツのルール、広く言えば社会のルールそのものだって、まだまだ未完成だ。それによって自分や大切な人が居心地悪く感じているのであれば、思い切ってルールの方を変えてみるのはどうだろう。福祉には「医学モデル」と「社会モデル」という考え方がある。単純化して説明すると、医学モデルは「障害は人に宿る」、社会モデルは「障害は社会に宿る」という考え方だ。スポーツが苦手なのは、私ではなく、スポーツの方に改善の余地がある、という発想は実は「社会モデル」に基づいている。この視点の切り替えが、ここまで紙幅を割いて説明してきた活動につながっている。もしもあなたにも「苦手」や「弱さ」があるならば、是非社会の方を変えてみてはどうだろうか？それは、自らの手でこの世界をアウェイからホームに変えていくことに他ならない。

著者略歴

澤田 智洋 (さわだ・ともひろ)

1981年生まれ。幼少期をパリ、シカゴ、ロンドンで過ごした後17歳の時に帰国。2004年広告代理店入社。映画「ダークナイト・ライジング」の『伝説が、壮絶に、終わる。』等のコピーを手掛ける。東京2020パラリンピック閉会式のコンセプト/企画を担当。2015年に誰もが楽しめる新しいスポーツを開発する「世界ゆるスポーツ協会」を設立。これまで100以上の新しいスポーツを開発し、20万人以上が体験。海外からも注目を集めている。世界ゆるスポーツ協会代表理事/コピーライター。

また、一般社団法人 障害攻略課理事として、ひとりを起点に服を開発する「041 FASHION」、視覚障害者アテンドロボット「NIN_NIN」など、福祉領域におけるビジネスも多数プロデュースしている。著書に『ホメ出しの技術』（宣伝会議）、『マイノリティデザイン』（ライツ社）、『ガチガチの世界をゆるめる』（百万年書房）。